

## ガリラヤ湖畔へのエクスカージョン

テル・レヘシュ遺跡での発掘調査が終了し、ボランティアの学生たちもすでに帰国の途についた8月19日、調査団の一行は、今期の調査で発見された初期シナゴグ建築遺構の類例を調査するため、日帰りのエクスカージョンを実施した。参加したのは、出土遺物の調査や記録の作成など、残務のために現地に残った10名ほどのメンバーだ。

エクスカージョンの目的地は、ガリラヤ湖東岸の中心都市、ティベリアスから約5km北にあるミグダル遺跡。福音書におけるマグダラのマリアの故郷、マグダラと見られる町の跡、と言った方がわかりやすいだろうか。調査団の基地になっているキブツ・エン・ドールからは車で小一時間の道のりだが、目的地の遺跡は海拔マイナス200mのガリラヤ湖畔にあり、途中からは、真つ青なガリラヤ湖のパノラマを眼下に眺めながら、一気に山を駆け下りることになる。



考古学公園として新しく整備された遺跡の現地は、すでに観光名所のひとつになっていて、今から2000年前の西暦1世紀、ナザレのイエスが活躍していた時代の町並み（ヴィラ）を見ることができる。公園の南側に広がっているのが発掘された町並みの跡で、そこから通路を挟んだ北側の一面に、木製の天井を架けて、ひときわ丁寧に扱われている建物跡が、有名なミグダルのシナゴグだ（写真上）。西暦1世紀に遡る初期シナゴグの代表例として知られるこの建物跡は、今回、はじめて見学を行ったのだが、テル・レヘシュ遺跡で日本隊が発見した新事例を考えるうえで、やはり大いに参考になった。

## ミグダルの初期シナゴグ

現地解説板によれば、2009年、巡礼者用のホテル建設に先立つ発掘調査で見つかったこの建物跡は、第二神殿の破壊以前の西暦1世紀に遡るシナゴグ跡としては、ガリラヤ地方で見つかった最初の事例で、イスラエル国内では7例目になるものだ。

シナゴグの入口は、レヘシュの場合と違って、西側にあり、入口を入った細長い小部屋は、壁に石のベンチが設けられ、律法（トーラー）の教育の場として用いられたと考えられている。メインホールは約120㎡の広さがあり、3組の柱が木と土でできた天井を支え、切石の低いベンチが部屋を囲んで二重に並ぶ構造になっている。部屋の中央には、表面に独特のレリーフ装飾を施した切石の石壇があり、これは、置かれた場所からも、装飾の特徴からも、律法の巻物もしくは律法の櫃を置き、読むためのテーブルだったと考えられる。柱の外側の周歩廊は床面に幾何学模様のモザイクが残り、壁にはフレスコの赤彩が施されていた。

概して、考古学の発掘調査で発見された建物や部屋の具体的な機能を明らかにすることは難しい場合が多いのだが、ミグダ

ルの建物跡は、その構造と出土物の特徴から、シナゴグとして用いられたことが疑いなく、見学の結果、建物の構造そのものは、テル・レヘシュで見つかった建物跡と共通した特徴をもっていることが認められた。しかし、建物の規模や複雑さ、使用された石材の精巧さ、装飾の豪華さなど、いずれの要素を見ても、ミグダルの事例の方が、テル・レヘシュのそれよりも、数段勝っていることは明らかだった。考えてみれば、ミグダル（マグダラ）は、ガリラヤ湖の湖畔にあり、漁業で栄え、ナザレのイエスも説教に訪れた可能性がある大きな町だが、当時のテル・レヘシュは、そもそも、山あいの奥まった辺鄙な丘陵上にある小さなコミュニティにすぎない。違いがあっても当然なのだ。

## ユダヤを象徴する七枝の燭台

ミグダルのシナゴグで特に有名なのが、メインホールで見つかった四脚の石壇だ（写真右）。石壇自体が神殿の模型となっていて、切石の五面には、神殿のアーチと柱、神殿内に納められていた各種



のアイテム、ロゼッタ文様などが表現されている。北側の面には、七枝の燭台（メノラー）をはさんで両側に一組の壺（アンフォラ）が描かれている。七枝の燭台というのは、今でも、ユダヤ教を象徴するアイテムのひとつだが、ここに描かれているのは、エルサレムにあった神殿の中に納められていたそれだと考えられる。エルサレムにあるイスラエル博物館には、死海文書館のすぐ横に、第二神殿時代のエルサレムの街の模型が展示しており、神殿も復元されている。しかし、これはあくまでも想像復元で、ミグダルの石壇に表現された神殿の描写は、今は失われた当時のエルサレム神殿の様子をうかがい知ることができる他に類例のない貴重な同時代資料となっているのだ。

紀元前516年からエルサレムの神殿の丘に建っていた神殿（第二神殿）は、紀元前20年から19年頃、ヘロデ大王によって修繕と拡張工事が行われたが、ユダヤ戦争のエルサレム攻囲戦で、西暦70年、ローマ軍によって破壊され、以後、再建されることがなく、現在に至っている。エルサレム攻囲戦での先帝の戦功を称えて、ローマに建てられたティトゥスの凱旋門には、エルサレムの神殿から、戦利品として、七枝の燭台（メノラー）を運び出す情景がレリーフで表現されている（写真右）。



エルサレムの神殿は、ヘロデ大王時代の神殿を囲んでいた西壁の下部だけが今も残り、ユダヤ人の祈りの場所、いわゆる嘆きの壁となっている。神殿の丘は、イスラム教の開祖ムハンマドが昇天したとされる場所でもあり、現在、岩のドーム（西暦690年）とアル=アクサー・モスク（西暦710年）が建っている。ふたつの宗教の祈りの場所であると同時に、争いの絶えない場所でもあり、テレビのニュースでもおなじみのあの光景だ。